

イニシへとムカシをめぐって

白井清子

キーワード

イニシへ・ムカシ・類義語・栄花物語・源氏物語

一、万葉集の用法

万葉集では、イニシへとムカシとはかなり明確な違いがある。まず、ムカシは、過去にあったことから・事態が、今あることから・事態と深く結びついている場合の過去である（万葉集の用例中のイニシへとムカシは原文の形で示す）。

1 昔者（むかし）こそ難波田舎といはれけめ今は都引き都びにけり 八卷三・三二二V

今の「すっかり都らしいさまになった」現実に対する認識は、「難波田舎といわれただろう」過去の時点における事態の認識を土台にしており、この場合の過去は今と切り離せない。

2 昔見し象の小川を今見ればいよさやけくなりけるかも 八卷三・三二六V

今、象の小川を見ているが、その象の小川が「いよさやけくな」ったと認識することは、同じこの象の小川を過去に見た、その時の認識が脳裏に残っているので、「いよさやけく」と認識するのである。

右の二例は、いずれもムカシとイマを対立させた表現

である。まず、今、自分が認識している現実の世界があり、その認識している現実が、過去のある時期の現実を深く想起したことによって生じる認識なのである。今の深いかわりを有する過去がムカシである。

もちろん、ムカシの用例がすべて、イマとともに使われているわけではない。

3 昔こそよそにも見しか我妹子が奥つ城（き）と思へば
はしき佐保山 △巻三・四七四▽

この歌にはイマは使われていないが、「ムカシこそは……だったけれど今は」という意味が含まれている。

4 紀の国の昔獵師（さつを）の響矢（なりや）もち鹿
（か）獲り靡けし坂の上にそある △巻九・一六七八▽

これは、一見したところ、イマを認識しているとは言いがたいようであるが、「そある」で「今私はまさにその場所にいるのだ」という意味が示されている。

上代々中世におけるイニシへとムカシについては望月郁子氏の行き届いた論がある（注一）。その中で、氏は

ムカシの語源を「向カ・シ（方向）」とした上で、その原義を「心の向く過去」とし、上代のムカシは「懐かしく、忘れがたく心ひかれる過去」としている。語源については私も同意見だが、ムカシははたして「懐かしく、忘れ難く心ひかれる過去」ばかりであろうか。確かに、過去をふりかえる場合、その多くは懐かしく、忘れがたく心ひかれる過去であることが多い。しかし、さきあげた用例1の「昔こそ難波田舎といはれけめ……」の場合「今は……都びにけり」と今の状態を慶んでいるのであり、「難波田舎」と言われた過去を心引かれ懐かしんでいるとは言いがたい。

5 移り行く時見るごとくに心いたく牟可之の人し思ほゆる
かも △巻二〇・四四八三▽

この歌は家持作である。この歌が作られて数日後に橘奈良麿の変が発覚、失敗している。その計画等の事情を家持も知っていたらしい。家持は、一族の運命がどうなるかと、憂慮していた。この「昔の人」は自分とつながる過去の一族の人に違いない。単に懐かしい故人というのではないだろう。つまり、ムカシは、今の自分とかわりをもつ過去である。

ムカシは自分、乃至、自分の心が向く過去ではあるがそれは、「懐かしく、忘れがたく心ひかれる過去」だからでなく、今の事態とその過去が強く結びついている過去なのである。

ところが、イニシへの場合、過去に起こった事態・ことがらは、今起こっている事態・ことがらと、必ずしもつながってはいない（これについては神田典城氏の論がある。注2）。過去は過去として切り離され、今はその過去を単に思い起こすだけという場合が多い。

6 古^しの七の賢しき人^したちも欲りせしものは酒にしあるらし
△卷三・三四〇V

7 古^しゆ 言ひ継ぎけらく…… △卷一三・三三五V

のような伝承をあらわす場合がイニシへの代表的な用法であるが、これらは、過去にそういうことがあったただふりかえるだけである。

8 古^しもかく聞きつつか偲ひけむこの布留川の清き瀬の音を
△卷七・一一一一V

この、布留川の瀬の音が清いことは、過去にあったことからによって規定されているわけではない。これはイニシへも……であつたろうかと過去を推量してはいるが、過去の事態と現在の事態とのかかわりは少ない。

9 古^しに恋ふる鳥かも弓絃葉の御井の上より鳴き渡り行く
△卷二・一一一V

ここではイニシへの事態は何も示されておらず、現在、鳥が鳴き渡り行くことはイニシへとはかかわりがない。このようにイニシへは今とのかかわりの少ない過去である。

次のようなイニシへとムカシの、類似の例はどうだろうか。

10 我妹子は常世の国に住みけらし昔見しより菱若（を）
ちましにけり △卷四・六五〇V

11 古家（いにしへ）に妹と我が見しぬばたまの黒牛濁
を見れば寂しも △卷九・一七九八V

自分が見た過去の時点を用例10ではムカシといい、用

例11ではイニシヘといっている。用例10では過去に見たその同じ人をいま目にしているが、過去の姿と今の姿を比較し「姿若ちましにけり」という認識になっている。ところが、用例11では、過去に「妹と見し黒牛濁」を今見ると「寂し」くなるのだが、それは「黒牛濁」の事態に対する認識ではない。「黒牛濁」を「妹と見た過去とは「妹」の死んでしまった今はもうつながっていない。そう感じるからこそ「寂し」いのである。

ただし、イニシヘには次のような例もある。

12 香具山は 歟火雄々しと 耳梨と 相争ひき 神代
より斯くにあるらし 古昔(いにしへ)も しかに
あれこそ うつせみも 嬌を争ふらしき 八卷一・

一一三V

イニシヘに「嬌を争ふ」ことがあったからこそ今も「嬌を争ふらし」といっているのであるから、この例はイニシヘと今が強く結びついているように見える。しかし、用例12の場合、今起こっていることがらに対する理由を、イニシヘにもそうであったからかと推測しているのであるが、今「嬌を争ふ」現実自体はイニシヘがどうであろうと変わらない。したがって、今のことがらとイニシヘ

のことがらとは幾分隔たったものである。

このほかにイニシヘと今が結びついていると見える例は四例あるが、そのうち三例は「いにしへゆ いまのをづつ」と、永くつづいていることを述べている。他の一例は次のものである。

13 古の神の時より逢ひけらし今のころも常忘らえず
八卷一三・三一九〇V

これは用例12と似た表現である。

イニシヘの語源を望月氏は、「去ニシ方」と考え、「過ぎ去ったかなた」が原義だとしている。この語源に關しても、私は賛成である。動詞イヌ(往)は『岩波古語辞典』によれば、「その場にいたものが、姿を消して見えなくなる」意味を表す。イニシヘが「過ぎ去ったかなた」であるのは確かだが、それは勝手に見えなくなっており、今の人間や、今現実が起こっている事態とかかわりを持たない。ムカシが、今いる人が意識的に向くことによって知られる過去であるのと異なり、イニシヘは今いる人の意識にかかわりのない過去である。ここにムカシとイニシヘの大きな違いがある。

しかし、望月氏がその道筋を示しているように、イニシへとムカシの用法は徐々に近づき、伝承による過去、みずから体験した過去をとともに表すようになる。そして、ついにはムカシが大きな勢力をもつようになり、イニシへが衰退していく。

平安時代は、その、ムカシの用法・勢力の拡大、イニシへの衰退の道が大きく進む過程にある。その過程のかなり進んだ段階において書かれた、源氏物語と栄花物語は、成立の時期が近いと考えられているにもかかわらず、ムカシとイニシへの用法にはかなり差がある。そして、それは、実は、ムカシとイニシへの場合にだけ見られるのではなく、多くの語の用法について見られる、源氏物語と栄花物語の表現の差であると思われる。

ここに二つの作品におけるムカシとイニシへの用法を述べ、記述の差を示したい。論述の都合上、栄花物語から見てみる。

二、栄花物語のイニシへとムカシ

まず次の二つを比べてみよう。(注3)

14 いにしへの後は、童使はせ給はざりけれど、今の世

は御好みにて、さまざま使はせ給ふ。△巻八▽

15 昔の宮達は五七にて「五ツや七ツデ」こそ「父君二」御対面はありけれ。△巻四▽

この二つはともに、みずからの体験ではなく、おそらくは伝承等によって知り得た過去のことがらを述べているが、このイニシへとムカシにどれほどの違いがあるのだろうか。

16 「いにしへのありさまに心安くてこそ」以前ノヨウナ氣樂ナ身分デ」あらまほしく侍れ」△巻二三▽

17 昔「帝ヤ中宮カラ愛サレタ頃」の御有様恋しう悲しうて。△巻一▽

この二例はともに自分がすでに過ごしてきた日々をふりかえって表現したものである。このイニシへとムカシの違いも不明である。

栄花物語にはイニシへが三七例、ムカシが一一例あるが、前記のような用例から考えて、その用法を意味の違いだけで区別するのは困難である。しかし、二つの異

なる語が、それもかなりの数の用例が見いだされるのであるから、そこに何らかの違いがあったと考えざるをえない。その違いとはなんだったのか。数の少ないイニシヘをまずとりあげてみるのがよからう。

イニシヘの場合、用例三七例のうち、歌に出てくるのが二〇例と半数以上もある。栄花物語中の歌は、さまざまな人の歌を引用したものであつて、物語作者自身のもではない。それ以外にも白氏文集の文の引用も一例ある。そこで、歌や詩文以外の一六例について調べてみると、その意味はかなり限定されている。

18 「古今集デハ」いにしへの今のと古き新しき歌撰（え）りととのへさせ給　△巻一▽

19 いにしへのえもいはぬ喬どもの、今は名をだにも聞こえぬ「モノ」　△巻一一▽

のような例で、自分では直接経験したことではないけれども、言い伝えなどで知っている過去の事柄を述べるときに使われているのが一三例と大半である。

それ以外の三例のうち、一つはさきにかかげた用例16で、他の二つは次のものである。

20 いにしへ「出家スル前ニ愛情ヲカケテイタ頃」に猶
たちかへる御心の出でくれば　△巻五▽

21 上達部・殿上人なども、いにしへ・中頃などの事覚
え給ふは　△巻二三▽

このうち、用例20は、古今集七三四番の歌「いにしへに猶たちかえる心かな恋しきことにも忘れせで」を引いた表現であり、歌の方に入れてもよいものである。

用例16は退位を望む東宮のことではあるが、この少し前に「かかる程に、春宮……昔の御忍びありきのみ恋しくおぼされて」とあり、用例16の部分もムカシでもよいと思われるが、重複を避けたのかもしれない。

用例21は「中頃」の語が次に続くので、自分たちの過ごしてきた日々のことではあるが、「中頃」より前ということで、遠い日々としてイニシヘを使つたのであろう。以上を見れば、歌以外でのイニシヘは一、二の例を除きほとんど、自らが体験した過去ではなく、伝承などによつて知りえた過去を指す。

一方、栄花物語では、ムカシは用例数も多く、伝承によつて知られる過去にも（用例15）、自分の過ごした

日々としての過去にも（用例17）、そして、歌にも、歌以外にもかかわりなく使われている。その中で、あえて伝承等における過去に対してイニシへを使ったのはなぜなのか。そこで、二三例のイニシへが何に使われているかを見てみると、次のようになっている。（一）内は用例数。

和歌（3） 香（2） 色紙（1） 文を書き歌をよむことに関する人（1） 宮中のしきたり事情（1） 女御・后（2） 世の幸い（1） 皇子誕生をめぐっての政変（1） 高陽院のある場所（1）
これを見ると、和歌・文・香・色紙や宮中のしきたり、皇子や女御・后に關することなどに多く使われていることがわかる。単なる過去ではなく、古めかしさ、由緒正しき、格調の高さなどを特に表すための文語的表現だったのではないだろうか。

三、源氏物語のイニシへとムカシ

源氏物語ではイニシへは二〇〇例、ムカシは三七五例ある。（注4） まずイニシへとムカシの似た用法の例を示す。

22 例の四季の絵も、いにしへの上手どものおもしろき事どもを選びつつ筆とどこほらず描きながしたるさま、たとへん方なしと見るに △絵合▽

23 「絵八」年の内の節会とものおもしろく興あるを、むかしの上手どもものとりどりに描ける △絵合▽

これらは、いつとは明確に言えないが、過去のある時点についてのもの。

24 「モトノ頭中将デアル三位中将ハ源氏ト」学問をも遊びをももろともにし給ふ。いにしへももの狂ほしきまで挑み聞こえ給しをおぼし出でて △賢木▽
（このイニシへは、まだ一人とも若かった頃）

25 「薫ト自分ハ宮ハ」さるべきほどとはいひながら「親シイノガ当然ノ間柄タガ」あやしきまで昔より睦ましき中に、「自分が浮舟ト契ッテシマイ」かかる心の隔での知られたらむ時 恥づかしう △浮舟▽

これらは、今生きている人達がみずから過ごしてきた、以前の日々としての過去の例。

26 いにしへ「亡き大君」の御代りとなすらへきこえて
△早厭▽

27 宮は、亡せたまひにける北の方を、世とともに恋ひ
きこえたまひて、ただ、昔「亡き北の方」の御あり
さまに似たてまつりたらむ人を見むと思しける
△若葉下▽

これらは、亡き人の意味。

こうしてみるとイニシへとムカシは互いに似たような
用法をもっており、また、両者が同じ箇所混在してい
る場合もある。

28 良房の大臣と聞こえけるいにしへの例「(人)ノ異
文アリ」になすらへて白馬ひき、節会の日、内裏の
儀式をうつして、「源氏邸デ」昔のためしよりも、
こと添へて、いつかしき御ありさまなり △少女▽

29 「源氏ガ空蟬ニ」「昔より心うかりける御契りかな。
さすがにかばかりの睦びは絶ゆまじかりけるよ」…
…「空蟬ノサマハ」いにしへよりももの深くはつか
しげさ勝りて △初音▽

30 「齋宮女御ガ二条院ニ退出ノ折」御前の前栽の色々
乱れたる露のしげさに、いにしへの事どもかきつづ
け思し出でられて、…むかしの御事ども、かの野
宮に立ちわづらひし曙などを聞こえ出でたまふ。
△薄雲▽

このようにほぼ同じ時点のことをイニシへともムカシと
も述べており、この二つの語の違いが、単なる物理的時
間の遠近による違いとは捉えにくい。もちろん、伝承に
おける過去か、自分の経験としての過去かという違いで
もない。更に、栄花物語にあったような、文語的か否か
といった差だけでもない。しかし、一語の間の用法で違
いも確かにある。例えば、ムカシは前世の意味で使われ
るが、イニシへは使われない。

31 「柏木ハ女三宮ノ猫ヲ預カル」「恋ひわぶる人のか
たみと手ならせばなれ何とてなく音(ね)なるら
むこれも昔の契りにや」 △若葉下▽

32 「横川僧都ガ浮舟ニ」「不意に見奉りそめてしも
さるべき昔の契りありけるにこそと思ひたまへて」
△手習▽

「昔の契り」の形でいつも使われているが（注5）、
 「いにしへの契り」の例は見出だせない。ここにイニシ
 へとムカシの違いがあるのではないか。「昔の契り」と
 して前世からの因縁を述べるとき、必ず「その因縁に
 よって今……だ」と述べており、今とのつながりが浮き
 出てくる。つまり、ムカシはその過去の時点を取り上げ
 るとき、同時に、現在を考えていることが多いのではな
 いか。

33 「紫上ハ女三宮ト対面シタガ」いと幼げにのみ見え
 たまへば心やすくて、おとなおとなしく親めきたる
 さまに、昔の御筋をも尋ねきこえ給ふ 〆若菜上V

「昔の御筋」とは親や先祖の血筋のことである。このム
 カシも今の自分と直接つながりをもつ。

前世や先祖のことを指すこともあるムカシは、心理的
 に現在とつながりを強く感じる過去である。一方、イニ
 シへは、今とのつながりを特には感じなかったり、感じ
 られなくて、過ぎ去った遠い過去のこととして隔絶感を
 抱いている場合の過去である。このムカシとイニシへの
 違いは、万葉集のムカシとイニシへの違いに通ずるもの

である。

このような、ムカシとイニシへの基本的な相違をもと
 として、二語のもつ特徴を整理すると相対的に次のよう
 な差を示すことになる。（もちろん、数百以上もある用
 例のすべてが、この基準で画然と区別されるわけではな
 いが、傾向としてはかなり顕著に見られる）

イニシへ

ムカシ

- | | |
|------------|-----------------|
| ① 今との関連が弱い | ① 今との関連が強い |
| ② 遠い過去に多い | ② 近い過去に多い |
| ③ 伝承に多い | ③ 自分の体験に多い |
| ④ よく知らないこと | ④ よく知っていること |
| ⑤ 隔絶感あり | ⑤ ありありと思ひ浮かべられる |
| ⑥ 後悔・諦め | ⑥ ー |
| ⑦ 故事・由緒 | ⑦ 前世 |
| ⑧ 文体の差 | ⑧ 文体の文（ナド） |

今までに触れなかった例を少しあげておく。

⑥の例 遠い過去に近い過去か

女三宮の件で紫上が機嫌を損ねている場面

34 よろづいにしへの事を「源氏ハ」思し出でつつ、と
 け難き「紫上ノ」御気色を恨み聞こえたまひて、そ

の日は暮らしたまへれば、「女三宮ノ所へハ」え渡りたまはで　△若菜上▽

「いにしへの事」は二人が初めて会った時からそれ以後のことなどいろいろである。日本古典文学全集本（小学館）注では、須磨の別れのことなどとしているが、イニシハはもつと前からのことであろう。

35 いにしへの「大シタ後見モナカッタ若イ頃ノ源氏ノ」御ひびきはひよりも「匂宮や薫ハ」ややたちまざりたまへるおぼえ　△匂宮▽

このイニシハは、単に源氏存命中というより、もつと前の、源氏がまだ若かった頃をいう。匂宮や薫が話の中心となる時点がイマであるならば、源氏存命中の時点が一つ前の時代で、それよりさらに前の源氏の若い頃がイニシハである。だからこそ、匂宮や薫の方が、その時の源氏の勢力よりもやや勝っているといえる。

36 「柏木」「むかしより、かく命もたふまじく」「女三宮ヲ」思ふことを」　△若菜下▽

柏木については「年を経て」「女三宮ヲ」思ひわたりけ

る」という記述もあり、このムカシは数年前である。

37 「内大臣ハ夕霧ノ雪居雁へノ文ヲ見テ」「手をおいみじうも書きなられにけるかな」とのたまふも、「夕霧ヲ憎ンデイタ」昔のなごりなし　△藤裏葉▽

④の例　よく知らないことかよく知っていることか

38 「薫ガ中ノ君ニ」「かの「源氏ガ亡クナッタ時ノ」いにしへの悲しさは、まだいはけなくも侍りけるほどにて、いとさしもしまめにやはべりけん。なほ、この近き夢「今度亡クナッタ大君トノ夢ノヨウナ別レ」こそさますべき方なく」　△宿木▽（遠い過去でもある）

④の例。後悔・諦めを感じている時のイニシハ

39 男君「薫」は、「中ノ君ヲ匂宮ニ譲ッテシマッタ」いにしへを悔ゆる心の忍びがたさなども、いとしつめがたかりぬべかめれと　△宿木▽

40 「中ノ君ガ異母ノ中将ノ君ニ」「いにしへ頼みきこえける蔭「両親」におくられたまつりけるは、なかなか世の常に思ひなされて」　△東屋▽

①の例。地の文でムカシを使い、歌ではイニシへを使う
41 風、野分だちて吹く夕暮に、昔のこと思し出でて
「夕霧ガ紫上ヲ」ほのかに見たてまつりしものを、
と恋ひしくおぼえたまふに……いにしへの秋の夕の
恋しきにいまはと見えしあけぐれの空 △御法▽
さきにあげた用例28のように単に重複を避けたと思わ
れる例もある。

ムカシとイニシへの差は相対的なもので、しかもそれ
は多分に心理的なものであるが、源氏物語では、その二
語を使い分けることによって表現にさまざまな陰翳をも
たせている。次は玉鬘に心をひかれるようになった源氏
が紫上に玉鬘の事について語る場面である。

42 「玉鬘ハ」あやしうなつかしき人のありさまにも
あるかな。かのいにしへ「夕顔」のは、あまりはる
けどころなくぞありし。この君「玉鬘」は、ものの
ありさまも見知りぬべく、け近き心さま添ひて、う
しろめたからずこそ見ゆれ」 △胡蝶▽

玉鬘をほめつつ、それが、自身の亡き夕顔に対する気持

ちからの評価ではないことを匂わせるため夕顔のことを
ムカシと言わず、イニシへといっている。しかし、その
源氏も、玉鬘と面しているときには、

43 「玉鬘ガ」手習などして、うちとけたまへりけるを
起き上り給ひて、恥ぢらひ給へる顔の色あひいとを
かし。なごやかなるけはひの、ふと昔思し出でらる
るにも、忍びがたくて △胡蝶▽

と、ムカシを使い、夕顔のことがありありと思ひ出され
ていることがわかる。この少しあとにも、やはり「昔恋
しき慰めに」といって、玉鬘に言い寄っている。

幻の巻で、源氏が明石の君としみじみとした話をして
いる場面では、

44 「人をあはれと心とどめむは、わろかるべきことと
いにしへより思ひえて、すべていかなる方にも、こ
の世に執とまるべき事なくと心づかひをせしに……」
など、さして一つ筋の悲しさにのみはのたまはねど
△幻▽

「一つ筋のかなしさ」とは紫上と死に別れたことをさし

ている。「ずっと以前から執着を持たないようにと心がけてきたけれど」と昔をふりかえって語っているが、ここでムカシを使わずイニシへを使っているのは、この話を紫上の死去したことを考えながら源氏が述べているからで、紫上が生存していたところが、もう遠い昔のことと感じられ、隔絶感を抱いている。

次の例は、薫の出生の秘密を知っている老女房が薫にその事をうちあけようとするが、なかなか言い出せない場面である。

45 「さし過ぎたる罪もや、と思うたまへ忍ぶれど、あはれなる昔の御物語の、いかならむついでにうち出で聞こえさせ、片はしをもほめかし知ろしめさせむと、年ごろ念誦のついでにもうちませ思うたまへわたる験にや」 △橋姫▽

これに対し、薫が不審に思っている場面が次である。

46 怪しく、夢語り、巫女やうのものの間は語りすらむやうにめづらかに思さるれど、あはれにおほつかなく思しわたる事の筋を聞こゆれば、いと奥ゆかしけれど、げに人目もしげし、さしぐみに、古物語に

かかづらひて夜を明かしはてむも、ちちごちしかるべければ、「薫」「そこはかと思ひ分くことはなきものから、いにしへの事を聞き侍るも、ものあはれになん。さらば必ずこの残り聞かせ給へ」 △橋姫▽

ここで、老女房はムカシを使い、薫はイニシへを使っている。老女房にとつてみれば、薫の出生の秘密がわかつているから、今とのつながりを強く感じている。ところが、薫にとつてみれば、老女房が話そうとしていることと今の自分とのつながりがまだわからない段階であり、だからこそ、「古物語にかかづらひて夜を明かしはてむも、ちちごちしかるべければ」と、よそごとに対する態度になっている。ムカシとイニシへの使い分けによって老女房と薫の二人の意識の差がこのように示されている。

おわりに

古典語のイニシへとムカシの違いは何なのか、という素朴な問題から出発して、万葉集・源氏物語・栄花物語における使い方を調べてきた。ここでとりあげなかった作品については望月氏の論に詳しいので、それを見ていただきたい。

イニシへとムカシの用法の違いを調べることによって既に多くの人が感じていることであるが、あらためて、源氏物語は、栄花物語の場合のようにことばの使い方が単純ではないことを感じた。紫式部はみずからの、二語に対する指標によってさまざまな場面でこまかく使い分けていたのである。

注1 望月郁子「イニシへ・ムカシ考」(『常葉女子短期大学紀要第2号』) 昭和44年11月

注2 神田典城「万葉集十三番歌―「神代」と「古昔(いにしへ)」―(1)」「(2)」(『国語国文論集第二十五・二十六号』) 学習院女子短期大学国語国文学会 平成8、9年3月

注3 栄花物語の用例は次のものによる。

高知大学人文学部国語史研究会編『栄花物語本文と索引』 武蔵野書院 昭和60年10月

注4 源氏物語の用例数は次のものによる。

宮島達夫『古典対照語表』

注5 ムカシで前世をあらわすものに次の用例がある。

「昔の世にいかなる罪をつくり侍りて、かうさまたげさせ給ふ身となり侍りけん」(『蜻蛉日記・下・天延二年四月』)